

博士學位論文

内容の要旨
および
審査の結果の要旨

博甲第15号

令和5年度（2023年度）

京都文教大学

は し が き

本編は、学位規則（昭和28年4月1日文科省令第9号）第8条による公表を目的として、令和6年3月18日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨、論文審査の結果の要旨を収録したものである

学位記番号に付した甲は、本学学位規則第3条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

| 学位記番号 | 学位の種類 | 氏名 | 論文題目 | 頁 |
|--------|-----------------------|-----|---|---|
| 博甲第15号 | 博士(臨床心理学) (京都文教大学) | 青山巧 | 青年期における恋愛関係が人格発達に及ぼす影響 —怒りの感受と表出の観点から— | 1 |

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 青山 巧 |
| 学位の種類 | 博士（臨床心理学）（京都文教大学） |
| 学位記番号 | 博甲第15号 |
| 学位授与年月日 | 令和6年（2024年）3月18日 |
| 学位授与の要件 | 京都文教大学学位規則第3条第1項の規定による |
| 学位論文題目 | 自己調和体験に関する心理臨床学的研究 |
| 論文審査委員 | 主査 教授 川畑 直人 副査 教授 濱野 清志 副査 教授 松田 真理子 |

論文内容の要旨

本論文は、青年期の恋愛関係において、恋人に対する怒りを感じ、それを恋人へ建設的に表出するという経験が、その個人の人格的な発達を促すという考えに基づき論を展開した。本論文の構成としては、理論部、実証部、総合考察部となっている。

理論部では、これまでの恋愛に関する研究を概観し、実証研究の構想を論じた。理論部の第1章では、青年期の恋愛関係と成熟した恋愛関係について、比較検討を行った。まず、本論文における恋愛関係を「互いに恋愛感情を持つ二人が合意のもと、関係を構築・維持している二者関係」と定義した。青年期の恋愛関係は、アイデンティティが未確立であるため、自己が関心の中心となる「アイデンティティのための恋愛」（大野，1995）の特徴が生じやすく、本当の意味での親密さの体験には発展しないと考えられてきた（Erikson, E. H. 1959/2011）。しかし、近年においては他者との関係を通して、青年が心理的・人格的な成熟を経験する面に光が当たってきており、恋愛を経験することによってもたらされるポジティブな側面とネガティブな側面の両方を合わせて見ていくことが必要であると指摘した。

成熟した恋愛関係については、精神分析理論に基づいて考察を行った。本論文では関係性の視点を重視し、Balint, M.と Mitchell の考えに依拠し、成熟した恋愛関係には二つの特徴があると論じた。一つは、自身の欲求と恋人の欲求が同等の価値を持ち、それらが満たされることであるとした。もう一つは、関係の再構築が絶えず行われることであるとした。

第2章では、恋愛関係と怒りの関連について論じた。恋愛関係は主に依存性と融合を求める心理によって不安定になりやすく、恋愛関係の中に怒りが持ち

込まれやすくなると論じた。怒りは現状を変更したいという願望が背後にある攻撃性を伴った感情である（大淵，2015）。そのため、怒りが適切に表出されれば，うまくいっていないと感じている現状の変更，欲求充足，ストレスの低減，恋人との関係修復が可能になると考えた。反対に，怒りが破壊的に表出されると，ストレスの増加や親密さの低下，破壊的な相互作用の発生，極端な場合にはデートDVやストーカー的行為へと発展する可能性があるとして指摘した。また，怒りの否認・抑制は，感情体験を弱めることにはならず，自信の喪失や恋人から誤解されることが増す可能性があるとして指摘した。さらに，怒りを感じている個人が不満に思っている現状に耐え続けることになることを考察した。その個人が恋人から不当な扱いを受けていた場合，そのような現状が継続する危険性があるだろう。そのため，個人の精神的健康や恋愛関係の継続という観点から，怒りを建設的に表出し，恋人と適切に共有していくことが必要であると論じた。

第3章では，近年における日本の恋愛研究を網羅的検索とレビューを行った。高坂（2016）に続き，2013年4月から2020年3月の間にかけて，日本心理学諸学会連合に加盟する学会の学会誌に掲載された恋愛に関する論文を収集した。その結果，計33本の論文が収集された。KJ法を用いて研究内容について分析したところ，6つのカテゴリーに分類された（「恋愛における感情体験や認知」，「恋愛の病理的事象」，「関係の継続性に関する事象」，「他の人間関係との比較」，「他の人間関係との比較」，「恋愛による影響」，「関係研究の方法論」）。収集された33本の論文のうち，13本は恋愛の中でもネガティブな事象（「ネガティブな感情」：5本，「恋愛の病理的事象」：8本）に焦点が当てられていた。このことから，近年では恋愛のネガティブな側面に焦点が当てられていると考察した。

第3章第6節において，理論部のまとめを行い，本論文における実証研究の構想について論じた。青年期の未成熟な恋愛関係から，成熟した恋愛関係へと発展させていく一つの経路として，恋愛関係の中で怒りを適切に恋人と共有することであると考えた。まず，恋愛関係における怒りの体験を通して，青年がどのような変化を経験するのか，また，変化の有り様は恋人との間で怒りをどのように扱うかで違いが見られると考え，インタビュー調査を実施し検討を行った。次に，個人が恋人と良好な関係を築こうとしても，関係が破壊的になってしまう場合がある。そこで，対象関係の影響を考慮し，怒りの表出と恋人の反応の関連性について，質問紙調査を実施し検討を行った。

実証部の第4章では，恋愛関係の中で怒りを体験することは，パーソナリティの変化をもたらし，かつ，怒りがどのように扱われたかによって，もたらされる変化は異なるという仮説のもと，インタビュー調査を実施した。調査協力者の語りから抽出された変化を，質的統合法（山浦，2012）を用いて全体像の把握を試みた結果，6つの大項目にまとめられた（【自分の視点から離れて広い視野から他者を理解するようになる】，【上手くいかなかった対人関係のパターンを見直して新しいパターンを取り入れる】，【対人関係に対してポジティブな

感情が増加する】、【対人関係に失望し弱気になる】、【自身の対人関係の特徴を認識する】、【物事に対して熱中することが減って、すぐめんどくさいなってしまうようになった】)。

また、変化の有り様は、恋人との間で怒りがどのように扱われたかによっても異なるという考えに基づき、調査協力者を3群(受容群、拒絶群、抑制群)に分類し、変化の各グループを構成するラベルを群ごとにカウントした。その結果、受容群は「他者との関係がより愛情深くなる」, 「恋愛関係がより打ち解ける」という変化の生成に寄与していた。このことから、恋人と怒りを受容的に扱えた体験は、自他の境界をより明確に認識し、アイデンティティと親密性の主題の克服、「攻撃性と共存する能力」(Mitchell, 2002/2004)の獲得と関連すると考察した。拒絶群においては、【対人関係に失望し弱気になる】、[体験を通して他者イメージが多様化する]という変化の生成に寄与していた。このことから、怒りによって恋人と拒絶的な相互作用を経験することは、他の対人関係へもネガティブな影響をもたらす可能性があるとして考察した。抑制群については、【自身の対人関係の特徴を認識する】、[関係を改善するために新しい行動パターンを取り入れる]という変化の生成に寄与していた。抑制群は受容群、拒絶群と比べて、恋人と怒りに関するやりとりが積極的に行われていないことが特徴である。それにも関わらず変化が得られていることから、恋愛関係の中で怒りを経験することは、自分自身についての認識を深め、関係のあり方を見直そうとする考えを生じさせる可能性があるとして考察した。

第5章では、怒りの表出方法と恋人の反応の関連について、対象関係を考慮して検討を行った。「恋人の受容的反応」と「恋人の拒絶的反応」を目的変数として、怒りの表出方法、対象関係、「対話志向的表出」と対象関係の交互作用項を説明変数にした強制投入法に基づく階層的重回帰分析を行った。交際期間ごとに分析を行った結果、交際期間短期群では、「恋人の受容的反応」を目的変数とした場合、「婉曲的表出」は有意な正の偏回帰係数を示した。反対に、「同一性」、「希薄な対人関係」は有意な負の偏回帰係数を示した。一方、交際期間長期群では、「恋人の拒絶的反応」を目的変数とした場合、「攻撃的表出」は有意な正の偏回帰係数を示し、「親密性」は負の偏回帰係数を示した。これらのことから、比較的初期の恋愛関係においては、より表層的な関係を構築する際に求められる社会的スキルと関連する要素がどの程度身についているかが、関係の深化に寄与すると考察した。一方、交際期間がより長期の関係においては、これらの要素はあまり作用せず、むしろ、その個人のパーソナルな心理的成熟の程度が関係の深化に寄与すると考察した。

最後の総合考察部では、人格論的側面、発達論的側面、関係論的側面から力動的恋愛理論について論じた。まず、比較的初期の恋愛関係における人格論的側面としては、恋愛関係にあるとはいえ、比較的初期における関係の維持や怒りの相互作用という点では、友人関係などの対人関係と類似した特徴を有していると考えられた。本研究の結果から、怒りにまつわる相互作用においても、恋愛行動と並行して進展していく可能性があることが示唆された。恋愛関係の

比較的初期の段階では、親しい友人関係などと同様の行動や情緒的交流が見られ、そこから徐々に関係の深化に伴って、恋愛関係特有の性質が増していき、その個人の人格的な要素が恋人との相互作用に影響を及ぼすようになると考えられた。反対に、長期の恋愛関係においては、怒りが生じやすく、交際期間が短期の関係に比べ、怒りの問題を解決することは容易ではないと考えられる。Kernberg (1995) や Mitchell (2002/2004) が指摘するように、関係の継続には怒らないし攻撃性の問題に取り組む必要があると論じた。

次に、発達論的側面としては、恋人と怒りを受容的に扱えた経験は、恋人や他者が独自の意思を持った存在であり、自身の思い通りにならないということを経験しつつも、それでも友好的な関係を維持できるということを経験的に理解し、内在化された対象関係の再構成が生じたと考えられた。恋人と怒りの拒絶的な相互作用の経験は、その傷つきを受け止めてくれる人が周囲にいるかどうかによって、ネガティブな変化をより多く経験するか、ポジティブな変化を見出せるか分かれることが示唆された。恋人と怒りを共有する経験がなかった者については、自身の特徴の認識や、抑制的なあり方を変えていこうという動機づけは得られても、他者イメージを変容させるまでには至らなかったと考えられた。

最後に、関係論的側面としては、交際期間による主題の違いについて論じた。比較的初期の恋愛関係では、恋人と心地良い良好な関係を築くことが主題となるのに対し、長期的な恋愛関係では、現実的な課題について二人でどうやって解決していくかが主題となると考えられた。青年期の恋愛関係の場合、時間の経過に伴って互いの社会的立場の変化を考慮しなければならなくなる。進級や進学、就労などによって、活動拠点や生活水準などが変化し、さらには、共同生活をいつから始めるか、結婚はどうするのかなど、社会的契約に基づく関係へと発展させるかどうかを話し合う必要性が出てくる。Mitchell (2002/2004) の比喩に依拠するならば、初期の段階で築き上げてきた砂の城を、長期的な関係では、砂の城だと認識し、それをどのように再構築していくか、その中で互いのニーズをどれだけ満たせていけるかに取り組むのであるとした。

本研究の意義は四点あり、第一に、恋愛関係における怒りの経験が、関係の深化、そして各人の心理的・人格的成長にとって大きな意味を持つことを示唆したことである。第二に、関係の初期段階と継続した段階では、関係の質が変化していることについて、データを以って示したことである。第三に、調査方法に偏りが指摘されている恋愛研究において、多角的な視点から検討を行ったことである。第四に、精神分析における恋愛関係理論を実証的に裏付けようと試みたことである。

本研究の課題は四点あり、第一に、研究方法の限界である。第二に、調査が一般の大学生のみを対象に行われたということである。第三に、臨床事例との関連性の検討が不十分である。第四に怒りの原因について、実証研究の中で取り扱えなかったことである。

最後に、今後の展望としては、今回は恋愛関係という親密な二者関係におけ

る怒りに限定して研究を行った。しかし、親密な関係の中で生じるネガティブな側面を否認や抑圧をすることなしに、それらを乗り越えてより親密な関係を構築していくという考え自体は、夫婦関係やセラピストクライアント関係などの二者関係のみならず、組織や集団といった人の集まりにおいても応用可能であると考えている。さらに、近年、不安定な社会情勢により、世界の一部地域において紛争や戦争が行われており、社会的、文化的軋轢などが目に見えるようなかたちで発生している。このような国家や民族同士の闘争以外においても、日常においても目に見えないかたちで性別や社会的地位、世代間などにおいても軋轢は生じていると考えられる。それらの軋轢から目をそらさず、乗り越える方法を模索し、健全な社会の構築に貢献していきたいと考えている。

引用文献

- Balint, M. (1952). *Primary love and psycho-analytic technique*. London: Tavistock Publications. 森茂起・柘矢和子・中井久夫 (共訳) (1999). 一次愛と精神分析技法. みすず書房.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.
- Kernberg, O. (1995). *Love Relations: Normality and Pathology*. New Haven: Yale University Press.
- 高坂康雅 (2016). 日本における心理学的恋愛研究の動向と展望. 和光大学現代人間学部紀要, **9**, 5-17.
- Mitchell, S.A. (2002). *CAN LOVE LAST? The fate of Romance over Time*. New York: Norton. 池田久代 (訳) (2004). 愛の精神分析. 春秋社.
- 大淵憲一 (2015). セレクション心理学 28 紛争と葛藤の心理学—人はなぜ争い, どう和解するのか. サイエンス社.
- 大野久 (1995). 青年期の自己意識と生き方. 落合良行・楠見孝 (編) 講座生涯発達心理学 4 自己への問い直し 青年期. 金子書房, pp.89-123.
- 山浦晴男 (2012). 質的統合法入門—考え方と手順. 医学書院.

論文審査の結果の要旨

本論文は、青年期の恋愛関係において、恋人に対する怒りを感じ、それを恋人に建設的に表出するという経験が、その個人の人格的な発達を促すという考えに基づき、インタビューと質問紙調査を用いて、怒りの感情の扱いと恋愛関係の進展並びに人格的発達との関連を実証的に明らかにしようとしたものである。論文は理論部3章、実証部2章、総合考察部1章で構成されている。

理論部の第1章では、精神分析理論に基づく成熟した恋愛関係の特質に照らし、青年期の恋愛関係の特徴が整理されている。従来、青年期の恋愛関係は、アイデンティティが未確立であるため、自己が関心の中心となりやすいと考えられていたが、近年においては他者との関係を通して、青年が心理的・人格的な成熟を経験する面に光が当たってきている。著者は、その関係性を理解する視点として、BalintとMitchellの考えに注目し、成熟した恋愛関係には、自身の欲求と恋人の欲求が同等の価値を持ち、それらが満たされること、そして、関係の再構築が絶えず行われることが条件になると指摘している。

第2章では、恋愛関係と怒りの関連について論じられている。恋愛関係は主に依存性と融合を求める心理によって不安定になりやすく、恋愛関係の中に怒りが持ち込まれやすい面がある。しかし、怒りが適切に表出されれば、問題のある現状の変更、欲求充足、ストレスの低減、恋人との関係修復が可能になると筆者は指摘する。反対に、怒りが破壊的に表出されると、ストレスの増加や親密さの低下、破壊的な相互作用の発生に加え、極端な場合にはデートDVやストーカー的行為へと発展する可能性も示唆される。また、怒りの否認や抑制は、感情体験を弱めることにはならず、自信の喪失、恋人からの誤解、不満のある現状の継続につながる。そのため、個人の精神的健康や恋愛関係の継続にとって、怒りを建設的に表出し、恋人と適切に共有していくことが必要であると著者は論じている。

第3章では、近年における日本の恋愛研究の網羅的検索とレビューを行っている。2013年4月から2020年3月の間にかけて、日本心理学諸学会連合加盟学会の学会誌に掲載された恋愛に関する論文計33本が収集された。KJ法を用いて研究内容について分析した結果、近年では恋愛のネガティブな側面に焦点が当てられているという結果が得られた。それを踏まえ、さらに1章、2章の論考と合わせ、怒りの感情の扱いが、恋愛関係と人格の成長にどのように寄与するかを調べるための実証研究を構想している。

実証部の第4章では、インタビュー調査を実施し、調査協力者の語りから抽出された変化を、質的統合法を用いて分析している。また、調査協力者を3群に分類し、怒りの感情を受容的に共有した群では、他者との関係がより愛情深くなる、恋愛関係がより打ち解けるという変化の生成に寄与していることを見出している。一方、拒絶的な表出をした群においては、対人関係に失望し弱気になる、体験を通して他者イメージが多様化するという変化の生成に寄与していることを見出している。

第5章では、怒りの表出方法と恋人の反応の関連について、人格要因としての対象関係を考慮して検討を行っている。「恋人の受容的反応」と「恋人の拒絶的反応」を目的変数として、怒りの表出方法、対象関係、「対話志向的表出」と対象関係の交互作用項を説明変数にした強制投入法に基づく階層的重回帰分析を行っている。交際期間ごとに分析を行った結果、比較的初期の恋愛関係においては、より表層的な関係を構築する際に求められる社

会的スキルと関連する要素が関係の深化に寄与しており、一方、交際期間がより長期の関係においては、それらの要素はあまり作用せず、むしろ、その個人のパーソナルな心理的成熟の程度が関係の深化に寄与していることを見出している。

恋愛関係における怒りの経験が、関係の深化、そして各人の心理的・人格的成長にとって大きな意味を持つことを示唆したことは、本研究の重要な成果である。また、関係の初期段階と継続した段階では、関係の質が変化していることについて、データを以って示したことも貴重な成果である。特に関係が進む中で、表層的な関係の技巧的な側面よりも、個人の心理的な成熟度が重要であるという知見は、青年期の恋愛の特徴にとどまらず、親密な人間関係の構築を考える上で重要な示唆をもたらしている。

さらに、著者は、こうした研究の成果に基づき、精神分析における恋愛関係理論に検討を加えており、現代の関係論に代表される新しい恋愛関係理論を、実証的に裏付け、より詳細に内容を吟味する端緒を開いたという点は大いに評価できる。また、この研究で得られた知見は、青年期の心理臨床全般にとって参考となるだけでなく、面接関係における怒りを含んだ転移・逆転移関係の理解にもつながり、今後の研究の発展が期待される内容となっている。

以上のことから、本論文が、博士論文の基準を十分に満たす論文であると思料する。

以上

博士学位論文 内容の要旨及び審査結果の要旨 博甲第15号

令和6年(2024)4月1日発行

編集・発行 京都文教大学大学院臨床心理学研究科

〒611-0041 京都府宇治市槇島町千足80

TEL 0774-25-2426 FAX 0774-25-2498
